

## 資料 PCAF 参加アーティスト (16組、五十音順)



**青柳 菜摘**  
Natsumi Aoyagi

Photo by Shintaro Wada



【参考作品】《彼女の権利—フランケンシュタインによるトルコ人、あるいは現代のプロメテウス》2019年 展示風景 Photo by Shintaro Wada

1990年東京都生まれ。ある虫や身近な人、植物、景観に至るまであらゆるものの成長過程を観察する上で、記録メディアや固有の媒体に捉われずにいかに表現することが可能か。リサーチやフィールドワークを重ねながら、作者である自身の見ているものがそのまま表れているように経験させる手段と、観者がその不可能性に気づくことを主題として取り組んでいる。近年の活動に「青柳菜摘 + 佐藤朋子『TWO PRIVATE ROOMS - 往復朗読』」(theca、東京、2020年)、「オープン・スペース 2019 別の見方で」展参加 (NTT インターコミュニケーション・センター [ICC]、東京、2019年)、個展「富士日記」(NADiff Gallery、2016年)、「第10回 恵比寿映像祭」参加 (東京都写真美術館、2018年) など。また書籍に小説『黒い土の時間』(自家版、2017年) などがある。プラクティショナー・コレクティブである「コ本や honkbooks」主宰。「だつお」というアーティスト名でも活動。



**池田 剛介**  
Kosuke Ikeda



【参考作品】  
《モノの占拠》京都芸術センター、2016年  
Photo by 木奥恵三

1980年福岡県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。モノや絵画をめぐる関心を軸に制作やプロジェクトを行う一方、批評誌などでの執筆を手がけている。主な個展に「現象と干渉」(MEDIASHOP | gallery、京都、2019年)、「モノの生態系」(絶対空間、台南、台湾、2015年)、「メルボルン芸術発電所」(RMIT PROJECT SPACE、メルボルン、オーストラリア、2013年) など。主なグループ展に「Malformed Objects」(山本現代、東京、2017年)、「Regeneration Movement」(国立台湾美術館、台中、2016年)、「あいちトリエンナーレ 2013」(愛知、2013)、「東京芸術発電所」(東京藝術大学、2011年) など。主なプロジェクトに「モノと占拠」(京都市立芸術大学、2018年)、「モノの占拠」(京都芸術センター、2016年) など。著書に『失われたモノを求めて 不確かさの時代と芸術』(夕書房、2019年)。2019年より京都にてアートスペース「浄土複合」をディレクション。



**遠藤 麻衣**  
Mai Endo



【参考作品】《蛇に似る04:たまご丸》2020年  
Photo by 松尾宇人

1984年生まれ。俳優・美術家として、自らの身体を通じたおしゃべりやDIY、演技といった遊戯的な芸術実践を行う。2021年東京芸術大学美術研究科博士後期課程美術専攻油画(壁画)研究領域修了。近年の制作として、婚姻契約という形式を通して婚姻制度を問う《アイ・アム・ノット・フェミニスト!》(2017/2021)、理想の性器の造形からセクシュアリティを考える百瀬文との共作《Love Condition》(2020) など。主な展覧会に、「ルール?」21\_21 DESIGN SIGHT(東京、2021年)、「彼女たちは歌う」(東京芸術大学陳列館、2020)、「When It Waxes and Wanes」(VBKÖ, ウィーン、2020)、「アイ・アム・ノット・フェミニスト!」(ゲーテ・インスティテュート東京、2017)。2018年に丸山美佳と「Multiple Spirits (マルスピ)」を創刊。主なエッセイに「毛むくじやらの山」(蜘蛛と箒『原稿集』、2020)がある。



## 大和田 俊

Shun Owada

Photo by 百頭たけし



【参考作品】《unearth》2017年「裏声で歌へ」展での展示風景、小山市立車屋美術館、栃木、2017年  
Photo by 富田了平

1985年栃木県生まれ。現在、東京を拠点に活動。音響と、生物としてのヒトの身体や知覚、環境との関わりに関心を持ちながら、電子音響作品やインスタレーションの制作を行なっている。東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院美術研究科修了。近年の主な個展に、「破裂 OK ひろがり」（小山市立車屋美術館、栃木、2020年）、「大和田俊 | unearth」（ボルボ スタジオ青山、東京、2017年）、「Paleo-Pacific」（トーキョーワンダーサイト本郷、東京、2016年）、「unearth」（NTT インターコミュニケーション・センター、東京、2015年）など。同、参加グループ展やフェスティバルには「WRO Biennale」（National Museum in Wroclaw、ヴロツワフ、ポーランド、2019年）、「Ars Electronica 2018」（POSTCITY、リンツ、オーストリア、2018年）、「不純物と免疫」（トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京、2017年）、「裏声で歌へ」（小山市立車屋美術館、栃木、2017年）などがある。



## 小泉 明郎

Meiro Koizumi

Photo by Matadero Madrid  
/ Photo by Bego Solis



【参考作品】《証言の天使たち》2019年、ビデオ・インスタレーション Courtesy of the artist, Annet Gelink Gallery and MUJIN-TO Production

1976年群馬県生まれ。切尔西・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン（ロンドン）にて映像表現を学ぶ。現在は国内外で滞在制作し映像やパフォーマンスによる作品を発表している。「あいちトリエンナーレ 2019 情の時代」（愛知県美術館／愛知芸術文化センター、2019年）、「第14回シャルジャビエンナーレ」（シャルジャ美術館、アラブ首長国連邦、2019年）、「個展『Battle lands』（マイアミ・ペレス美術館、マイアミ、2018年）他、国内外の展覧会・国際展に多数参加。主な受賞歴に「第9回アルテス・ムンディ賞」、「第30回タカシマヤ文化基金タカシマヤ美術賞」、「第24回文化庁メディア芸術祭」アート部門大賞。作品は、東京国立近代美術館、国立国際美術館（大阪）、テート・モダン（ロンドン）やニューヨーク近代美術館など多くの美術館に收藏されている。



## SIDE CORE

Photo by 濱田 晋



【参考作品】《under pressure》  
Photo by 表 恒匡

2012年より活動開始。メンバーは高須咲恵、松下徹、西広太志。ストリートカルチャーを切り口にアートプロジェクトを展開。「風景にノイズを起こす」をテーマに、都市や地域でのリサーチをベースにアクションを伴った作品を制作。ギャラリーや美術館での展覧会開催の他に、壁画プロジェクトや街を探索する「ナイトウォーク」など野外空間での活動を展開。全てのプロジェクトは公共空間での視点や思考を転換させ、表現や行動を拡張することを目的としている。主な個展に「SIDE CORE / EVERYDAY HOLIDAY SQUAD 個展『under pressure』」（国際芸術センター青森、2021年）など。主な参加展覧会に「大京都芸術祭」（京丹後、京都、2020年）、「生きている東京展」（ワタリウム美術館、東京、2020年）、オンライン展「Out of Blueprints by Serpentine Galleries」（NOWNESS、2020年）。



Photo by ZIGEN

## サエボーグ

Saeborg



【参考作品】《SAEBORG LAND》2019年「DARK MOFO」でのパフォーマンス、Avalon Theatre/MONA、ホバート、オーストラリア、2019年 Photo: DARK MOFO 2019

1981年富山県生まれ。東京都拠点。サエボーグはラテックス製の着ぐるみ（スーツ）を自作し、自ら装着するパフォーマンスを展開するアーティスト。これまでの全作品は、東京のフェティッシュパーティー「Department-H」で初演された後、国内外の国際展や美術館で発表されている。2014年に岡本太郎現代芸術賞にて岡本敏子賞を受賞。主な個展に「LIVESTOCK」

（PARCO MUSEUM TOKYO、2021年）など。主な参加展覧会に「第6回アテネ・ビエンナーレ」（Banakeios Library、ギリシャ、2018年）、「DARK MOFO」（Avalon Theatre/MONA、ホバート、オーストラリア、2019年）、「あいちトリエンナーレ」（愛知県芸術劇場、2019年）、「Slaughterhouse17」（Match Gallery/MGML、リュブリャナ、スロベニア、2019年）、「Cycle of L」（高知県美術館、2020年）、「Reborn-Art Festival 2021-22（夏会期）」（宮城県牡鹿半島、2021年）などがある。



## 竹内 公太

Kota Takeuchi



【参考作品】《文書 1: 王冠と身体》2020年、インスタレーション、コピー紙にレーザープリント Courtesy of SNOW Contemporary

1982年生まれ。福島県帰還困難区域内の展覧会「[Don't Follow the Wind](#)」実行委員。東京電力福島第一原発ライブカメラの「指差し作業員」の代理人。パラレルな身体と憑依をテーマに、映像・写真のインスタレーション等を制作。失われた歴史の痕跡を辿り、隔絶された土地で協働しながら、メディアと人の関係を探る。2020年個展「Body is not Antibody」（SNOW Contemporary、東京）にて、パンデミックにおける国家／身体のイメージについてのインスタレーションを発表。2021年には第3回「Tokyo Contemporary Art Award 2021-2023」受賞。また個展「Parallel, Body, Possession」（SNOW Contemporary、東京）を開催した。



Photo by 山口聖巴

## Chim ↑ Pom



【参考作品】《A Drunk Pandemic》2019年 Photo: Michael Pollard Courtesy of the artist, ANOMALY and MUJIN-TO Production

卯城竜太・林靖高・エリイ・岡田将孝・稲岡求・水野俊紀により、2005年に東京で結成されたアーティストコレクティブ。時代のリアルを追究し、現代社会に全力で介入したクリティカルな作品を次々と発表。世界中の展覧会に参加するだけでなく、独自でさまざまなプロジェクトを展開する。東京電力福島第一原発事故による帰還困難区域内で、封鎖が解除されるまで「観に行くことができない」国際展「Don't Follow the Wind」（2015年-）の発案と立ち上げを行い、作家としても参加している。現在は新宿の「ホワイトハウス」を拠点に活動。そのプロジェクトベースの作品は、日本の美術館だけでなくグッゲンハイム美術館（ニューヨーク）、ポンピドゥ・センター（パリ）などにコレクションされ、アジアを代表するコレクティブとして時代を切り開く活動を展開中。



## 中村 裕太

Yuta Nakamura

Photo by 表 恒匡



【参考作品】《群馬工芸の生態系》2019年「表現の生態系：世界との関係をつくりかえる」展での会場風景、アーツ前橋、群馬、2019年 Photo by 表 恒匡

1983年東京生まれ、京都在住。京都精華大学芸術学部特任講師。2011年京都精華大学芸術研究科博士後期課程修了。博士（芸術）。〈民俗と建築にまつわる工芸〉という視点から陶磁器やタイルなどの学術研究と作品制作を行なう。近年の展示に「六本木クロッシング 2013：アウト・オブ・ダウトー来たるべき風景のために」（森美術館、東京、2013年）、「第8回アジア・パシフィック・トリエンナーレ」（クイーンズランド・アートギャラリー、ブリスベン、2015年）、「第20回シドニー・ビエンナーレ」（ギャラリーワークス、2016年）、「あいちトリエンナーレ」（愛知県美術館、2016年）、「柳まつり小柳まつり」（ギャラリー小柳、東京、2017年）、「MAM リサーチ 007：走泥社-現代陶芸のはじまりに」（森美術館、東京、2019年）、「表現の生態系：世界との関係をつくりかえる」（アーツ前橋、群馬、2019年）など。著書に『アウト・オブ・民藝』（共著、誠光社、2019年）。



## 西村 雄輔

Yusuke Nishimura



【参考作品】《yamaji orimono\*works》

1976年福岡生まれ。2001年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。2003年より群馬県桐生市の産業遺産である旧織物工場の改修／修繕プロジェクトを手がける。Moriyoshi Reconstruction Project（2003～2004年、旧森山芳平織物工場）、現在長期に渡り進行中のYAMAJIORIMONO\*WORKS（山治織物工場、2006年～）では、傷んだ木造の建物に工場主とともに実際に手を入れながら、その場所と対話し、ものが語る歴史を読み、今を生きる場をつくる行為の在り方を提示している。



## 長谷川 愛

Ai Hasegawa



【参考作品】《Human X Shark》2017年、リサーチ・プロジェクト

アーティスト、デザイナー。バイオアートやスペキュラティブ・デザイン、デザイン・フィクション等の手法によって、生物学的課題や科学技術の進歩をモチーフに、現代社会に潜む諸問題を掘り出す作品を発表している。IAMAS卒業後渡英。2012年英国 Royal College of ArtにてMA修士取得。2014年から2016年秋までMIT Media Labにて研究員、MS修士取得。2017年から2020まで東京大学 特任研究員。2019年から早稲田大学非常勤講師。2020年から自治医科大学と京都工芸繊維大学にて特任研究員。「(不)可能な子供/(im)possible baby」が第19回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞。森美術館、アルスエレクトロニカ等、国内外で多数展示。主な個展に「長谷川愛展 4th Annunciation」(TERRADA ART COMPLEX II、2021年)など、主な著書に「20XX年の革命家になるには——スペキュラティブ・デザインの授業」(ビー・エヌ・エヌ新社、2020年)がある。





## 布施 琳太郎

Rintaro Fuse

Photo by 梅沢和木



【参考作品】《隔離式濃厚接触室》2020年、ウェブページ Photo by 竹久直樹

1994年生まれ。2017年東京藝術大学美術学部絵画科（油画専攻）卒業。現在は同大学大学院映像研究科後期博士課程（映像メディア学）に在籍。洞窟壁画をはじめとした先史美術についてのリサーチとiPhoneの発売以降の社会の分析を下敷きに、絵画やインスタレーションなどの作品制作、展覧会の企画、運営、キュレーション、テキストの執筆を行う。近年の個展に「名前たちのキス」（SNOW Contemporary、東京、2021年）、参加展に「Reborn-Art Festival 2021-22（夏会期）」（宮城県牡鹿半島、2021年）など。主な展覧会企画に「iphone mural（iPhoneの洞窟壁画）」（BLOCK HOUSE、東京、2016年）、「新しい孤独」（コ本や、東京、2017年）、「ソラリスの酒場」（the Cave/Bar333、神奈川、2018年）、「The Walking Eye」（横浜赤レンガ倉庫、神奈川、2019年）、「余白／Marginalia」（SNOW Contemporary、東京、2020年）、「隔離式濃厚接触室」（ウェブページ、2020年）、「沈黙のカテゴリー | Silent Category」（クリエイティブセンター大阪、2021年）など。



## 毛利 悠子

Yuko Mohri

Photo by 前田直子



【参考作品】《モレモレ：与えられた落水》2015年-木材、傘、ホース、ペット・ボトル、ゴム手袋、パケツ、ホイール、雑巾、スポンジ、アクリル樹脂など Photo by Blaise Adilon, Biennale de Lyon, 2017

1980年神奈川県生まれ。東京在住。磁力や重力、風や光など、目に見えず、触れることもできないかと、日常のありふれた素材との出会いが生む表情にフォーカスしたインスタレーションを制作。主な個展に、「毛利悠子：ただし抵抗はあるものとする」（十和田市現代美術館、2018年）、「Voluta」（カムデン・アーツ・センター、ロンドン、2018年）。ほか、「第34回サンパウロ・ビエンナーレ」（2021年）、「ウラル・インダストリアル・ビエンナーレ」（エカテリンプルク、ロシア、2019年）、「アジア・パシフィック・トライアニュアル 2018」（ブリスベン、オーストラリア、2018年）、「リヨン・ビエンナーレ 2017」（フランス、2017年）、「コーチ=ムジリス・ビエンナーレ 2016」（インド、2016年）など、国内外のグループ展への参加多数。2015年に日産アートアワードグランプリ、2016年に神奈川文化賞未来賞、2017年に第67回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。



## 百瀬 文

Aya Momose



【参考作品】《Social Dance》2019年、シングルチャンネル・ビデオ、10分33秒

1988年東京生まれ。近年の主な個展に「Born to Die」(switch point、東京、2020年)、「I. C. A. N. S. E. E. Y. O. U」(EFAG、東京、2019年)、「サンプルボイス」(横浜美術館アートギャラリー1、神奈川、2014年)、主なグループ展に「新・今日の作家展 2021 日常の輪郭」(横浜市民ギャラリー、2021年)、「彼女たちは歌う」(東京藝術大学大学美術館陳列館、2020年)、「六本木クロッシング 2016 展: 僕の身体、あなたの声」(森美術館、東京、2016年)、「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」(国立新美術館、韓国国立現代美術館、東京、2015-16年)など。2016年度アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨーク(Triangle Residency)に、その後ソウル(SeMAレジデンス)に滞在。2019年、イム・フンスン氏と共同制作した《交換日記》が全州国際映画祭(JIFF)に正式招待される。2020年は上述展に加え、同じくPCAF参加アーティストでもある遠藤麻衣との「新水晶宮 New Cristal Palace」展(TALION GALLERY、東京)で共作を発表、また「シアターコモンズ'21」(東京)にセラピーパフォーマンス『鍼を打つ』で参加した。



## 柳瀬 安里

Anri Yanase



【参考作品】《光のない。一わたしの立っているところから》2016-2017年、ビデオ、16分56秒

1993年埼玉県生まれ。2016年京都造形芸術大学美術工芸学科現代美術・写真コース卒業。身の回りの出来事を出発点とし、それが何なのかを考えるため、知るためのひとつの方法として作品を制作している。知ったかぶりすることなく反応することを大切にしたいと思っている。近年の参加展に、『Oh! マツリ☆ゴト 昭和・平成のヒーロー&ピーポー』(兵庫県立美術館、2019年)、『Gallery selection: Video works』(ギャラリー小柳、東京、2019年)、「ニューミュレーション#3 菊池和晃・黒川岳・柳瀬安里」(京都芸術センター、2020年)、「泥深い川」(墨田区内複数会場、2020年)などがある。

---

※「プレスリリース添付画像」の参考作品画像を使用して本件を記事化していただく際は、「プレスリリース添付ファイル」が示す各作品のキャプションやクレジットを必ず画像と併せてご記載ください。